
君の空。

吉四六

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の空。

【Zマーク】

Z7502A

【作者名】

吉四六

【あらすじ】

中学三年の長沢空は、同じクラスの葉山ミナオと付き合っている。でもミナオは本当は空を好きじゃなくて、空ばかりがミナオを好きで。
。すれ違う一人を取り巻いている悲しみ。たくさんの人への心の傷。好きの意味。何も分からぬけど、何一つ知らないけど、それでも空はミナオと居たかった。ミナオの悲しみをなくしたかった。
純粹な一つの思いは、何処までも澄んだ蒼い空にとけていく。

新着メール一件

真っ黒だった液晶に光が点る。小ささだけに拘った白いの携帯。その無機質物な体のディスプレイに、そんな見慣れた文字が映し出された。スライド式のそれを操作して、メールを開く。

『今日は来なくても良い』

本文はたつたそれだけ。それ以外に何があるわけでもない。
嘆息して、携帯をポケットにしまつ 落胆した訳ではない。ただ、呆れたのだ。

メールの送り主は、居心地の悪い教室の中心の席で、ぼんやりと何も書かれていない黒板を見ていた。それに苦笑する。アイツは私のことなど少しも気に止めていないのだろう。もう慣れてしまつて、腹は立たなかつた。

嫌なら断ればいいだけ。アイツは何も私に強制している訳ではないのだから。NOと言えない自分が悪いことくらい、分かっている。アイツこと、葉山ミナオと付き合い始めたのはちょうど1ヶ月前。告白したのはアイツ。そして出会って三回目の雨の季節に、私たちは彼氏と彼女になつた。

容姿も成績もすべてそこそこで、特別得意なことも苦手なことも無い。友達は少ないけどまったく居なくはない。いじめられた経験もない。『ない』ばかりの私の人生で、告白してきたのはアイツが初めてだつた。

正直言つて嬉しかった。私はずっとアイツが好きだったから。好きで好きで、ずっとアイツだけ見てきたから。でもこんなのは違う。

私たちは付き合っているけど、お互いに想い合ってはいない。少なぐともアイツは私のことなんか少しも好きじゃない。だからこの関係は偽物だ。

付き合つてよ、と。ひどく軽い感じにアイツは言つた。それはどうでも良いような話と、それ以上にくだらない話の合間に言われた言葉だった。

言葉を失つて呆然とする私に、アイツはいつもの胡散臭い笑みを浮かべてもう一度言つた。ねえ、付き合つてよ。そう言つて笑つた。窓際の席から、こっそりと横顔を見つめる。

アイツは微笑んでいなかつた。ただぼんやりと黒板を、あるいは黒板ではない何かを眺めていた。ノートを開いているようだが何か書き込んでいる様子はない。手持ち無沙汰にペンを回している。

付き合つてよ、とアイツは言つた。胡散臭い笑みとガムの臭いのする吐息。それが鮮明に焼き付いて離れない。

何故好きなのかとか、どこが好きなのかとはあまり考えなかつた。

一目惚れではなかつたけど、それに近かつたように思つ。何時の間にか好きだつた。当たり前のようになつてから少しの時間しか経つていなかつたのに。

ミナオと出会つたのは中学の入学式。

桜の花は早々と散つてしまつて、楽しみにしていたのにその年は花見にも行けなかつた。他にも嫌なことがたくさんあつて、とにかく私は絶望していた。自分の人生も、きっと桜のように散つてしまつたのだと思つた。

受験に失敗した私には、夢も希望も無いように思えた。たかが中学受験だと言うのに、それは世界が滅亡するのと同等の絶望を私に齎した。辛かった、苦しかつた。自分に何の価値も見いだせなくて、もう死んでしまつたかつた。

不本意ながら入学した公立中学は、長い桜並木の先の丘の上にあった。校門までの長い坂に花弁が積もって、桜色の絨毯ができていた。その入学式でアイツと出会った。

脱色した髪の毛が綺麗な、肌の白い男の子だった。髪も肌も白くて、他の色はほとんど無かつた。流石に瞳はちゃんと黒色をしていたけれど、それが逆に他の異質さを際立させていた。

目立つ子だと思った。だから記憶に残っていた。入学してみると同じクラスだった。委員会も同じだったので、少しづつ話すようになつた。その頃には確かに恋心を自覚していた。

見た目通り変な奴で、驚くほどマイペースで。他人に左右されたりしない強さを持っていた。それが羨ましくて、ひどく惹かれた。好きになつた。

そして二年が過ぎた。

今私たちは付き合っているけど、それは嘘の関係。ミナオは私のことなんか好きじゃない。

ずっと見てきたから、わかる。

アイツが本当は誰が好きかくらい。

それでも私はミナオを捨てられない。

だってアイツが好きだから。誰よりも何よりも、自分よりもずっと好きだから。

私には何も出来ない。この関係を終わりにするにしても、一緒に居て欲しいと縋ることも。

毎日アイツからのメールを待つて、呼び出されたときだけ彼女として振る舞う。来なくていいと言われたら黙つて引き下がる。それだけの関係。

私は今日もアイツからのメールを待つだらつ。夜中まで携帯を見つめながら、待ち疲れて眠るだらつ。そして明日になつて また、待つのだ。ずっと。

「馬鹿みたい」

知ってる。

わざわざ口に出さなくとも、分かりきつてたことだ。
私はこいつらを見ようともしないミナオの脇を通り過ぎて、教室を出
た。

廊下の窓から見える空は青かつた。

ポケットの中で携帯が震える。私はそれに気づかないふりをして歩
き出した。

街はいつもブルーだ。

私は今日もミナオを見てる。

空の青とはビックリでも深いディープブルー。ため息が出来るほど綺麗な深海の色。その空は手を伸ばせば届きそうなくらい近い。夏の始まりの雲のない晴れやかな日には、また私はミナオを見つめていた。

窓際の席から見える表情は笑顔。胡散臭いけど人懐っこいとも言えなくない笑みを浮かべて、誰かと話をしていた。

視線が無意識にアイツを追いかける。

馬鹿みたいだ。

半田近く見つめているのに一度も視線が重ならないのは、アイツが私を見ないから。それだけのことだ。そしてそれは何時もの繰り返し。何てことのない私の日常。

夏休みが始まるまで後少し。でも、それまでこんな日常が続くのだと思つたため息が漏れた。

ぼんやりしている間に、古典の授業が終わる。

私以外の生徒が立ち上がり、退席する教師に軽く頭を下げる。大して興味の無さそうな視線で古典教師は教室を見渡す。しばらくして、引き戸が閉まる耳障りな音が聞こえた。

遅れて立つのが嫌で、私はそのまま田直の言葉を無視して座つていった。誰も何も言つてこなかつたので、私もそのままぼんやりし続ける。

ミナオは授業中からずっと友達と話していた。

ははは、と乾いた笑い声が聞こえる度、冷めていく自分。いや、冷めていくのではない。遠ざかっていく。自分と言う存在の、肉体と意識が切り離されるような感覚。

ミナオを見ていると切ない。でもそれ以上に苛つく。私はミナオが好きだ。それなのに、アイツを見るとイライラする。私がアイツを見ているのは、アイツのことが好きだから。じゃあ、こんなにも苛立つのはなぜだらう。

「空」

そんなことを考えていると、後ろから名前を呼ばれた。

振り返ると亜美がいた。腰までの長い明るい色の髪が、視界いつぱいに踊り込んでくる。

利き手にペン、反対の手に問題集を持ちながら、彼女はいつきに私との距離を詰めた。

「ねえ、最後のトコわかった?」

「あー、那儿……」

「六番の漢文の訳」

「…………。『めん、ぼーっとしてた』

私が言つと、亜美はくすくすと笑つてノートを見せてくれた。

綺麗な書体で書かれた小さな文字。それを真剣に追いかけて、答えを告げる。古典はあまり得意ではないけど、何とか解くことができた。それに亜美も喜んでくれる。

大きな、髪と同じで明るい色の亜美の瞳。それが私と同じように真剣に問題を見つめていた。

可愛らしい桃色の唇。小さいけど整った鼻梁。全体的に小さい、すらりとした体躯の上に乗った頭部。どこから見ても、亜美は可愛い。

「ありがと、やっぱ空は頭いいなあ」

「普通だよ」

「えー、じゃあアタシが悪いのかなあ。それってひどくない?」

そう言つて高い声で笑いながら、亜美は自分の席へ戻つて行った。軽く手を振つてくる亜美に手を振り替えして、視線を前に戻す。見てているのは黒板なんかじゃない。ミナオだ。私が見てているのはミナオ。ずっと、いつもそう。

少し跳ねた柔らかそうな髪。日に焼けた首筋。まだ成長しきっていない狭い背中。ずっと、そんなものを見ていた。後ろ姿だけでアイツだと一目でわかる。見慣れた背中だ。

「ミナオ」

アイツに感じてこの愛しさと苛立ち。どちらも同じくらい強くて、私を困らせる。

好きなのに素直になれない。

苛立ちと、少しのプライドが邪魔をする。

遠くで授業の始まりを告げるチャイムが聞こえた。それを夢のよう

に虚ろに、ぼんやりと聞いていた。

ポケットの中で携帯が震える。

それは本当に小さな振動で、私はよく気付かないで放置してしまつ。でも、アイツからのメールのときは何故だかすぐわかる。その些細な揺れを、私の鈍化な身体は気まぐれに感じ取ってくれる。

新着メール 一件

『 ポケットの中で携帯が震える。
それは本当に小さな振動で、私はよく気付かないで放置してしまう。
でも、アイツからのメールのときは何故だかすぐわかる。那些細な揺れを、私の鈍化な身体は気まぐれに感じ取ってくれる。

新着メール 一件

スライド式の携帯のむき出しのディスプレイにその文字が映されたとき、私は嬉しさに高鳴る胸を抑えることができなかつた。あまりにも単純で、自分が嫌になる。

『今日の放課後、暇?』

思つた通り、メールはミナオからだつた。

胸が甘い疼きを覚えて締め付けられる。「ううつとき、自分がミナ
才を好きなんだと再確認する。この淡泊すぎるほどの一通のメール
が、すべての苛立ちと不安を取り除いてくれる。

『暇だけど、何か用?』

何の装飾もない、ミナオと同じ淡泊なメール。

なのが好きだと知っている。

和だちにはしばらくノーノをやり取りして、放課後一緒に何か食べに行く約束をした。誘われたのか誘わされていないのかわからない微妙な内容だったが、アイツがメールを寄越すと言つことは、一緒に来いと言うことなのだろう。

そう勝手に納得して、携帯を閉じた。

授業が終わるまでまだ時間がある。相変わらずアイツは私に何の興味もない素振りで、知らない誰かと話しているけど。この退屈な授業が終われば、アイツは私だけのものになる。

嘘つき、と誰かが言った。

私はまた空を見上げる。

呆れるほどに深いディープブルー。

それを無粹な雲が隠してしまわぬことを、切に願つた。

白濁した意識の中で、夢を見ていた。

穏やかな日々を退屈だと感じるのは、私がまだ幼いからだらうか。幸せな筈の平和な時間を、つまらないと思つてしまつのは我儘だろうか。

でも、きつと仕方が無い。どうしようも無いことなのだと思つ。单调な日々が足早に通り過ぎる度に感じる、痛いほどの焦燥感。私だけではない。みんな感じている。その中でもがいでいる。

放課後の図書室で教科書を睨みながら、そんなことを考えていた。時計を見るとそれは六時を廻つており、辺りを見回すと誰もいなかつた。それなりに広い部屋の中で、私だけが取り残されたようにボソリと存在している。嘆息して、私は散らかつていた筆記用具と教科書を片付けた。

耳を欹てると、近くの天井に設置されたクーラーの音が聞こえた。その風音のような物に混じつて僅かな電子音が聞こえる。緑色のセンサーが数回点滅して、それは停止した。

ぼんやりと受付を見ると、司書の若い男と目が合つた。あからさまに咳払いをされる。帰れ、と言つことらしい。

借りたい本があつたのだけど、仕方なく諦めて席を立つ。

シャーペンの芯で利き手の指先が汚れていた。大して勉強した訳でもないのに真っ黒だ。汚れたままの手で学生鞄を持ち、椅子を戻してから机を離れる。

引き戸をガラガラと音を立てて開いて外に出た。

冷房の効いていない廊下は蒸し暑く、歩く度に体温が上がりしていく気がした。ほんの少し踵の高い上履きと床がぶつかって、べたべたと間抜けな足音が響く。それに思わず笑ってしまった。

私は幸せなのかもしれない。誰にも命を脅かされること無く、餓える心配も無く、誰かに殺したいほど憎まれている訳でもない。世間一般に、それは幸せと言つことなのだろうから。

それでも時々見失う。何の為に生きているのかわからなくて、ひどく迷う。

毎日は呆れるほど穢やかで、単調で、自分が今ここにいる意味がわからなくなる。何の為に生きているのか、何の為に存在しているのか、答えが見付からない。

何かの本に、悩むことこそが生きていることの証明だと書いてあった。人生について悩むことが、人間として生きるということだと。それが人と他の動物との差なのだと。

その意味が私にはわからない。

難しいのか、単純なのか、よくわからないその言葉の意味を真剣に考えてみたことがあった。しばらく考えてみたけど、やはり答えは出なかつた。

荒んだ気分を振り払うように頭を振る。

夕暮れに染まつた茜色の空の所為で、少し感傷的な気分なつている馬鹿みたいだ。黄昏に町は染まり、校門からずっと遠くまで続く道は何処までも明るかつた。下校するたくさんの影にその色が映えて、景色はとても美しかつた。それを見ていると無性に切なかつた。

その中の一つに、見慣れた人影を見つける。

葉山ミナオ。

何時も真っ白な彼が、夕陽を浴びて色を得ていた。淡い茜色は優しそうな彼の姿にとても似合つていて、思わず見とれる。

四階の窓から見つめたアイツは、何時ものよつに氣だるげで、霸気が無く、その相変わらずな様子がとても愛しかつた。

それを横目に見ながら歩いて、そのまま階段を降りる。

ミナオが遠ざかっていくにつれて、次第に私の歩調も速くなつた。 穏やかだった足音が五月蠅くなつていき、最後には小走りに変わる。 追いかけたら間に合つかもしない。そんな期待を抱きながら、一気に階段を駆け下りる。

前後していた足が平たい床に着いて、下の階まで階段を下りたことに気付いた。私は手すりを握りながら身体を反転させる そのとき、その階の廊下から現れた人影に、思いつきりぶつかつた。

「ツ！」

中途半端な受身の姿勢で、私の身体は横倒しになつた。右腕が強い衝撃で痺れ、その後に熱を持った痛みを感じる。

相手は何とか踏みどどまつたようで、倒れてくる気配は無かつた。

「大丈夫か？」

「…………。なんとか」

答えながら肘を擦つた。

夏服のため、むき出しの腕が赤くなつてゐる。

「悪い。急いでたから」

短い謝罪の言葉を口にして、私は急いで起き上がった。

何か言おうとする相手を遮るように、目の前を横切つて階段を踏み締める。懲りもせず私はまた駆け出した。

きっともう間に合わない。アイツはもうバス停に着いてしまっているだろう。無意味だとわかっていて、それでも必死に走ってしまうのは惚れた弱味という奴だろうか。

馬鹿みたいだ。

そう口の中で呟いて、俯きながら何処までも走った。
階段は永遠に続くかのように思えたけど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7502a/>

君の空。

2010年10月20日12時25分発行